

座談会 多角化する多文化公共圏センター —多文化公共圏フォーラムを創設して

	国際学部長	中	村	真
	国際学部附属多文化公共圏センター長	高	橋	若
国際学部附属多文化公共圏センター副センター長		米	山	正
国際学部附属多文化公共圏センター員		倪		永
国際学部附属多文化公共圏センター員		申		恵
国際学部附属多文化公共圏センターコーディネーター		田	宮	純
				子

米山：本年度の多文化公共圏センター年報では「多角化する多文化公共圏センター」という特集を予定しております。その特集の一部としてこの座談会を企画いたしました。今年度からいくつか新しい企画が始まっています。まずは多文化公共圏フォーラムの開催です。それからセンターと連携した科目で「グローバル、グローバル研究演習」の科目名が変わり「多文化公共圏実践演習（グローバル、グローバル）」となっています。また、各プロジェクトを国際協力・グローバル課題、内なる国際化・地域連携、異文化理解にグループ化しました。ホームページの英語版の整備や、ワーキングペーパーシリーズの開始もあります。今日は特に各プロジェクトの内容と多文化公共圏フォーラムを中心にお話を伺ってきたいと思います。

こうした新しい企画については、昨年度、「多文化公共圏センター改革ワーキンググループ」での検討から生まれたものと理解しております。センターの機能評価という目的だったと思いますが、まずはそのあたりからお話を伺っていただければと思います。学部長の中村先生、ワーキンググループの座長でいらっしゃいました高橋先生にお話しいただければと思います。

中村：米山先生から、きっちりまとめていただきましたが、経緯ということと言いますと、学部の機能強化の一環としてセンターの機能強化

ということがありました。もう少し大きな枠組みで背景を話しますと、昨年度は第3期という中期目標期間の最後の年で、今年度から第4期という新しい6年間、国立大学法人の中期目標期間が始まりました。それに当たって新しい中期目標期間で大学がどういう取り組みをしていくかということが問われ、各学部にもそれぞれ、この新しい第4期の6年間でどのような目標を立てて取り組んでいくかということを検討することが求められていました。

そういう中で国際学部が、どんな新しい目標を立ててやるかということ話し合うと同時に、附属多文化公共圏センターがそれまでどんな課題を抱えていて、それを克服しながら、新しくどんなことをやっていくかという話をしないといけないということがあったということです。

これまでの多文化公共圏センターの活動で特徴的だったのは、何人かの非常に積極的な先生がたが中心になって取り組んでこられたプロジェクトが突出していましたので、それが非常に社会的にも評価を受けた重要な活動だったのですが、反面、この先生がた以外の教員はセンターの活動というのにあまり関わる機会がなかったというような状況があったと考えています。そういう状況を、もっと学部全体でセンターを盛り立てていくような、センターが学部の教員の教育研究を全体として強めていくよう

な、そういう役割を果たすことが必要と考えました。それは言葉としては社会と学部を結ぶハブとかプラットフォームとしての多文化公共圏センターという位置付けにして、その機能を強化していくことを考えました。

そういう背景がありまして、ワーキングを設置したのが7月でした。座長は高橋先生にお願いしました。高橋先生は当時、副学科長だったのですが、来年は学科長になられてセンター長を務められるので座長をお願いしまして、高橋先生が中心になって積極的にいろいろな策を立てていただいたり整理をしていただきました。具体的な取り組みの中身とか検討した様子とかについては、高橋先生にお話しいただければと思います。よろしくお願いします。

米山：ありがとうございます。それでは、高橋先生、お願いします。

高橋：はい、ありがとうございます。もう先生がたが十分にご説明くださったのですが、三点にまとめます。まず、多文化公共圏センターは、一部の先生がたが突出して、リードして引っ張ってこられました。ですが、十数年という時間が経ち、ずっと支柱を担ってきた先生たちが退官されることになりました。ではどうするか、ということで、これまでの事業も大切にしつつも、これからは全員試合でいきましょう、という方針が変わってきました。

二つめのポイントは、これまでの多文化公共圏センターは、どちらかといえば社会的問題に比重が置かれていたことです。例えば外国人児童問題ですとか、あるいは国際協力の関係ですとか、あと福島原発事故以降の被害者調査や構造の解明などです。今後は、社会問題だけではなく、多様な人たちの共生や異文化交流も進めていきたいという方針をたてています。さまざまな文化とか宗教、環境を持つ人々との共生を

目指し、多様な立場の当事者が集って、自由に意見を出し合って、横社会の連携を大切にしていきます。そのような多様な人々の文化、交流は、他者への尊厳とか多様性というものを育み、それはまたよりよい問題解決にもつながります。このような空間を、もともとハーバマスが提唱した公共圏概念を踏まえて、われわれは多文化公共圏と呼んでいます。多文化公共圏センターが多角化をめざすということは、まさにこうした様々な分野、場所において、多文化公共圏の創造を応援していくということになります。

三つめのポイントは、国際学部は、あまりにもトピックが広いので分かりにくいと言う声に応えようとしたことです。そこで、多様な取り組みをわかりやすく見えるようにするために、一連のイベントに多文化公共圏フォーラムという冠をつけてまとめていきました。さらに、多文化公共圏に関するワーキングペーパーをシリーズで出すことにしました。このような形式を整えることで、いろんな多文化公共圏があることを広く知っていただき、そこに、いろんなかたがたに参加していただく。その多文化公共圏にかかわる教員たちも応援し、手助けしていく。そういう機能を多文化公共圏センターに持たせることにしました。

米山：ありがとうございます。多文化公共圏フォーラムの目的について丁寧にご説明いただきました。それでは、プロジェクトに実際に関わってらっしゃる先生方に、今年度の活動の紹介を含め、プロジェクトの内容をご紹介いただければと思います。日光プロジェクトご担当の倪先生からお願い致します。

倪：日光プロジェクトの前に他の大事なプロジェクトもありますけれども、取りあえず今年度の日光プロジェクトについて、二つの内容を

お話ししたいと思います。まず1番目は今年度の日光プロジェクト実施状況についてですけれども、今年度は二つの面で大きく、従来と変わりました。一つ目は、やはりコロナの3年目ということですね。従来のように学生さんが多人数で参加したり、あるいはフィールドワークを2回やるっていうのは難しいっていうことは日光市から要請がありました。日光市からするとフィールドワークは1回、そして従来のシンポジウムに代わる報告会というのものも、ある程度、規模縮小でやってほしいという要請がありました。

それに対してフィールドワーク1回という、従来の2回から1回に変わったことを補うものとして、こちらでは学習会を用意し、行く前にきちんと留学生さんに勉強してもらって、予備知識を持ってフィールドワークに参加していただければ1回だけでもそれなりの成果、得られるのではないかとということで、センター長のアイデアのもとでフィールドワークの前に1回、学習会を初めて行いました。これが一つ目の大きな、変わったところです。

二つ目は責任者の交代ということです。今までこの日光プロジェクトは7年間、今年度を足すと8年目になるんだけど、7年間の責任者は今年になって定年退職ということで責任者の交代ということになりました。日光市との交渉を含め、新しい責任者ということで、いろんなことを模索しながらやるということも一つ、大きな変わったところです。まだ12月の報告会が残ってはいるものの、大きなことは取りあえず一通りやってきました。

実施状況をさらに細かく説明しますと、まず10月18日、説明会を行いました。学生に募集をかけて、集まった学生に対して、まず全体の日光プロジェクト説明会を1回、行いました。18日でした。そして学習会ということで翌週の10月25日、国際学部教員、そして日光のかたがた

に参加して分担していただいて、学生さんに対して学習会を行いました。今回は従来と違って、視点として文化的価値ということを中心に観光地づくりを留学生と一緒に考えるということですが、この文化的価値は何かということ、四つの視点に分けて考えてもらうことにしました。まず当然ですけれども日光の世界遺産としての文化的価値。そして皇室文化ということも実は日光市に、そういうのが残っています。そして西洋建築文化、後で話しますが。そして宗教文化。四つの視点で学生に考えてもらいました。学習会でもそういう四つの視点からそれぞれ日光市文化財の方や学部教員に解説していただきました。

そしてこのフィールドワーク、11月5日で三つのグループに分けて行いました。学生さんは参加者18名、教職員7名、そして日光市国際交流協会の9名のかたがた、計34名の参加者になりました。今回は日光市西町を中心にフィールドワークを行いましたけれども、グループAは田母沢御用邸記念公園、こちらは皇室文化になりますけれども、日光東照宮、神橋というコース。グループBは金谷ホテル歴史館、こちらは西洋建築文化になりますけれども、日光山の輪王寺、そして大猷院というコース。グループCは、午前中はグループAと同じですけれども田母沢御用邸記念公園、そしてその後ですね、日光の真光教会、青龍神社、二荒山神社というコースになっていました。天気もよくて紅葉の真ただ中で非常に恵まれた晴れた日ということで、参加される教職員も学生さんからも好評だったと思います。残りの報告会は、来月の10日ですけれども、2時間、午前10時から12時ということで学生さんに、この文化的価値について、ぜひいろいろと提案なりしていただきたいと思っています。

二つ目の内容として、今後の課題について、感じたことについて話していきたいと思いま

す。まず一つはやはり責任者ですね。毎年度交代でやってもいいかもしれませんが、ただ新しい先生が責任者になるとまた日光との信頼関係づくりというか、交渉にも一からやる問題に直面するので、固定した責任者にすべきかどうか、一つの考えるべき課題かと思います。

二つ目は、今回、実施して感じたことですが、学生の募集からフィールドワークまでの時間はどうしても短いかと感じました。後期から学生募集をすると日光の季節の問題もあって、どうしてもフィールドワークは11月の中旬にしないと、その後の気候が非常に寒くなってしまって、フィールドワークがなかなかできないということです。どうしても11月の中旬までにフィールドワーク、1回でも2回でも終わらせないといけない。今年度を含めて8年間、後期の10月からスタートして、1カ月の間に学生の募集、参加人数確定、新たに学習会を入れると、どうしてもスケジュールがタイトになってしまいます。

場合によって、例えばですけれども前期から学生募集をして、当然、後期に大学に入ってくる留学生は参加できないけれども、もし前期から募集をかけると夏休み中1回目のフィールドワークできるかもしれません。天気の良い夏に奥日光に入って、環境保護や滞在型観光を経験できるかもしれません。後期からの学生は1回目のフィールドワークには参加できないんですけれども、それらの学生は2回目だけの参加、前期からの学生だと1回目、2回目の参加ができるかもしれません。もう少し時間をかけてのんびりできると、もっといい提案をできるかもしれませんし、学生にとっても日光に1回だけではなくて何回も訪れて、いろんな、見る場所、観光スポット、おもしろいところがあるので、それもいいかなと思います。私の感じたところは以上ですけれども、これぐらいでよろしいですかね。

米山：ありがとうございました。今後の課題も含め、詳しい報告をしていただきました。日光プロジェクトは従来、地域連携の面が強かったと思うのですが、今年度は文化的価値の発見ということで進めて下さいました。地域連携と異文化理解にまたがるプロジェクトになったかと思います。それでは、申先生、今年度から初めてHANDS事業に関わられましたか、少しご紹介いただけますか。

申：はい。長く関わっていらっしゃる先生方を差し置いて大変恐縮ですが、11月現在、HANDSでは大きく5種類の活動について、進行中のものやすでに終了したのがあります。一つ目は学生ボランティアの派遣で、11月現在、2校に派遣中、2校が募集中で、1校が派遣終了の他、夏休みにはAMAUTAという母語維持教室の夏休みの宿題支援にも学生ボランティアを派遣しておりました。二つ目に、外国人児童生徒教育推進協議会については、9月に第1回目を開催しました。この後、1月に第2回目を今回はオンラインで開催する予定です。三つ目に、多言語による高校進学ガイダンス、こちらもすでに終了しているところです。私自身は、宇大開催の多言語による高校進学ガイダンスに参加しました。四つ目に、こちらもすでに終了した活動ですが、HANDS Jr.の学生たちと連携して子ども国際理解サマースクールと那珂川町国際交流イベントを開催しました。子ども国際理解サマースクールのほうは8月に開催されまして、那珂川町国際交流イベントのほうは10月に宇大の学生会館で開催しました。最後に、ニュースレターの発行に向けて準備中という形で、大きく5種類の活動を進めてまいりました。

私自身は今年度から初めて関わるようになりまして、まだ全容が分かっていなかったり、「生まれ変わる」前のことはよく分からなかつ

たりもしているんですけれども、私自身にとっては非常に、栃木県を知るといふか、栃木県の国際化状況や、特に栃木県の外国人児童生徒の現状を知る大変貴重な機会になっています。

また、私は10月からより本格的に関わるようになりましたが、その際に、那珂川町の国際交流イベントはHANDS Jr.の学生たちが積極的に準備を進めてくれたり、夏休みの高校進学ガイダンスのときにもHANDSに関わる学生たちが、例えば英語やスペイン語などで通訳に入っていたりするのを見て、学生たちにとっても活躍の場になっているといふか、こういう国際交流であったり、地域における内なる国際化の推進であったりといふことを実際に経験する、非常に大切な機会になっているんだなといふことを実感しています。ニュースレターの原稿も学生から少しずつ上がってきて、見せていただいたんですけれども、夏休みの宿題支援に行っていた学生の場合、担当した小学生にあまりスペイン語で話したくないといふようなことを言われることもあったけれども、その経験から、日本語を優先的に身につけなければならない状況の中で母語とどう向き合っていくのかといふことを考えさせられたといふような文章を書いたりして。私の学生時代、自身や友人たちのことを振り返ると、なかなかこういうことを考えるきっかけはなかったなと思います。そう思うと、宇大の学生たちにとって、さらには地域で暮らす外国人児童生徒たちにとっても、とても大切な機会になっていると感じました。

さらに、外国人児童生徒教育推進協議会は地域の方々にとって各自の取り組みを共有してネットワークをつくる場になっていましたし、多言語による高校進学ガイダンスは日本に來たばかりで高校進学の制度がよく分からず大変不安になっている親子に必要な情報を提供する貴重な場になっていると感じました。ですので、振り返りますと、「国際交流」と「内なる国際

化の推進」がともにHANDSの大きな柱になっているといふことを実感してきた半年とちょっとでした。

米山：ありがとうございます。詳しく丁寧にご説明いただきました。学生にとっても意義があり、地域の人々にも貢献しているといふことが分かりました。

中村：ちょっと確認させてください。那珂川町の国際理解教育といふお話はHANDSっていうことではなくて、もう少し広い意味の国際理解教育っていふことなんですか、それともやっぱりHANDSの文脈での国際理解教育ですか。

申：私も詳しくは分かっていないのですけれども、経緯としては、那珂川町の生涯学習課の方から、HANDSの取り組みであってきただけの子ども国際理解サマースクールのことを知って、ぜひ那珂川町とも国際交流イベントをとといふような依頼をいただいたと聞いております。コロナの影響で従来進めていらした国際交流イベントを開催できなかったこともあり、あまり外国に触れる機会のない地域の子どもたちに、国際的なことを知ってほしいといふことで声をかけていただいて、留学生を含め、HANDS Jr.の学生たちが中心となって準備を進めました。

中村：なるほど、はい。ありがとうございます。恐らく、特に外国人児童、生徒を支援するといふよりは、もうちょっと広い文脈の活動を、たまたまHANDSの皆さんがやってくださっていたといふことだと思います。

高橋：HANDSは外から見れば、外国人児童が進学に苦勞され、勉学においていろいろ困っておられ、そういったところを助けよう、まさにHANDS、手を差し伸べていきましょうとい

うことだと思っていました。でも広く見ると、その対象となる児童さんたちを、直接支援して引き上げるだけじゃなくて、そのかたがたを、社会的に包摂する基盤をつくる。そういう意味では、今おっしゃったような国際理解スクールとかもすごく重要な役割を持っていて、それはまさに多文化公共圏のしかけなのかなと思いました。答えがない中で、カチツとした境をつくらずに、ふにゃふにゃした、なんとなく公共圏があそこでもここでもできているっていうのが今のHANDSの形になってきたのかなと、お聞きして思いました。それはそれですごくすてきだと思います。

米山：高橋先生は福島フォーラムに関わっていらっしゃるし、UU3Sもそうですが、今日はUU3Sを中心にお話しされますか。

高橋：はい。福島フォーラムについても簡単にお話ししてからUU3Sのお話をしたいと思います。実は、二つのプロジェクトは全然対象としている内容が違うようで、私の中では密接に結び付いているものです。

私は環境政治学を専門としていますが、福島での原発事故は、大変衝撃的で、21世紀最大の環境災害の一つとして捉えています。この事故の収束は今も完全にしないどころか、ここから先も何十年何百年、下手したら永久に解決しないかもしれない。大変な負債を社会は抱えてしまいました。発電所の爆発と放射性物質の大量拡散によって、いろんなレベルで人々は多様な被害を受けましたが、その中で私たちが着目したのは、生態学的にも脆弱な胎児とか乳児、子どもたちです。一番政策決定に遠い社会グループの一つであり、そういった子どもたちや、抱える親御さんなどの世帯を支援しようということ、数名の先生方や他大学の先生方、地域の方々とも共に、ずっとこの10年以上、

やってきました。

衝撃的な事故であったこともあり、当時は被害者たちに手を差し伸べる人は多くて、いろんな市民社会による支援や救済は、一定程度ありました。しかし問題が長期化化する中で、残念ながら国による被災者の調査は十分ではなく、支援策も被害の実態に見合わないものでした。ですので、今も苦境におられる方が、それこそ数万人規模でおられるのですが、社会の中でも問題が起きてから10年たつとすっかり忘れ去られて風化してしまっている。これを何とか記録にして残して、問題提起をするとともに、こういった問題を二度と引き起こさないようにしなくてはならない。このように考えて、清水奈名子先生と私を中心に、この数年間、ずっと続けてきたのが、福島原発震災に関する研究フォーラムです。

研究フォーラムでは、このような社会的被害は福島に固有のものではなくて、過去の環境災害、公害が形をかえて繰り返されている、構造的な問題として捉えています。そこで過去の公害についても、もう一度、掘り起こしていこうということで、注目しているのが、足尾銅山鉍毒事件です。足尾でも、見ていくと、やはり声なき被害者が本当に多様に存在していました。そこで、今も足尾を語り継ぐということも一方でやってます。つまり、福島フォーラムでは、現在の被害を見ると同時に、過去にさかのぼって見て対応策や教訓を得ようとしているのです。

では一方、未来はどう築いていけばいいのでしょうか。そこを語ろうとしているのがもう一つのUU3Sプロジェクトです。UU3Sの3つのSは、学生、SDGs、解決です。SDGsでは、ご存知のように誰一人取り残さないことが謳われています。これは、隠れた被害者を作らないことでもあり、まさに先程述べた過去からの教訓と通底しています。UU3Sプロジェクトでは

パートナーシップを大切に、SDGsの解決策を学生たちが主体となって、研究者、行政、地域の人たちなどと一緒に、研究教育・地域貢献一体型で、SDGsの解決法をめざす、未来志向型のプロジェクトです。

このプロジェクトで注目している一番大きな問題の一つが気候危機の問題です。このまま地球上の温室効果ガスの排出が続き、2050年に2度、3度、あるいはそれ以上に上がってしまうと、世界中で何十億人の人が灼熱の中で生きていけなくなり住み処を奪われ、そのほか、生態系全般にも経済にも深刻な影響が方々にあらわれる。そう科学者たちが警告をしている問題です。未来を担う子どもとか若者世代の人たちが私たちの年齢になっても、世界の気温上昇が1.5度に抑えるには、脱炭素が必要です。

これは技術的に不可能ではなくて、栃木県であれば、現在既に存在する省エネ・再エネ技術で100パーセント以上達成できるということが専門家の試算ではっきり分かっています。ただ、そういったことはあまり知られていないし、どういうポテンシャルがあるか、そのためにどんな政策が入ればいいのかも、まだなかなか可視化されていないのです。

世界に目を向けると、2050年目標よりももっと前倒して2030年にカーボンニュートラル達成しようとしている国とか地域が多くあります。特にヨーロッパでは取り組みが進んでいます。そこで、スウェーデンのルンド大学と提携して、モデル都市から学んで、それを日本の社会的文脈に落としたらどうなるか、どういう取組や政策が移転可能かを、アクションリサーチとして続けています。こうした一連の研究教育社会貢献を、まさに多文化公共圏フォーラムをいくつか創出してやっているのがUU3Sプロジェクトです。この過程では学問、机上の空論に終わらないように、現実子どもたちの再エネ教育に携わったり、あるいは里山保全の活動を一

緒にして汗を流したり、実践にも重きをおき、現実にかい離しないようにすることも目指しています。少し長い説明になってしまいましたが、このように私としては過去、現在、そして未来の問題を二つのプロジェクトを通じて考え、そのための多文化公共圏をいくつか創出していくことをめざしています。

米山：ありがとうございます。先生の中で二つのプロジェクトがしっかりつながっているということがよく分かりました。それでは、今年度からの取り組みとして多文化公共圏フォーラムがあるのですが、予定としては今24回ぐらいまで計画されていると思います。この中でこれまでに開催されたのは高橋先生でしょうか。

高橋：そうですね。

米山：一般公開という形で外部に発信されていると思うのですが、高橋先生、実際に開催されてみて、フォーラムの意義についてどのように感じていらっしゃいますか。

高橋：たとえば、第1回目は宇都宮の持続可能なエネルギーをテーマにしました。先ほど、ちょっとお伝えしたように、再生可能エネルギーっていろんな誤解がいっぱいあるんですよ。高いとか不安定とか、メガソーラーのように環境破壊を引き起こすとか。でもこれって、古い情報で、誤ったイメージも多いし、太陽光も適切な持続可能な方法で使うポテンシャルは大きいのです。そもそも再エネは太陽光だけではなくて、風力、太陽熱、地中熱、バイオマスをはじめ多様です。これらを使ったら、実は栃木県宇都宮市では100パーセントを超えるポテンシャルが既にあることも分かってきたんですね。というようなことを、国や国際機関とかいろんな統計データとかをひもといて、NPOの専

門家の人、学生たちと一緒に報告書を作り上げて、それを披露しました。すると、教室が埋まるくらい、100人でしょうか、結構な人数が来てくれました。その中には栃木県の議員さんとか、宇都宮市の政策の担当者の人とか、企業さんとかNPOの人とか、いろいろ結構、来てくださって、議論の時間はそこまでなかったんですけども、すごく注目してもらって、こんなポテンシャルがあることなんか知らなかった、元気がもらえたというふうに皆さんにおっしゃっていただいたのは、まさに多文化公共圏の意義があったと感じて、印象的でした。

この報告書の内容は、実は、多文化公共圏フォーラム以外の場所でも披露していて、環境大学では大人に、多文化公共圏実践演習では子ども向けに、伝えようとしています。環境問題って下手すると、がまんするだけっていう誤ったイメージがついてるんです。でも世界では、そうじゃなくて実は脱炭素って、みんなが幸せになれるいいツールにもなりえます。そういったことを現実的なものとして知ってもらえる。そこから、じゃあこんなことができるんじゃないか、あんなことができるんじゃないかっていう話に広がっていったのはすごく意義深いですね。

もう一つの印象的な多文化公共圏フォーラムは、宇都宮市の環境政策課さんとスウェーデンの Lund 大学と一緒に、この10月に行ったものです。先ほど言ったように、2050年どころか2030年にカーボンニュートラル達成をめざす都市があり、それはがまん大会をするんじゃないくて、むしろ心地よく、いい形で社会的な統合も進むような内容です。Lund 大学チームには、脱炭素へのハード・ソフトのインフラ開発が進んでいる地域の取り組みを披露してもらって、それを受けて日本ではどうかと、皆さんとディスカッションをしました。今までの脱炭素のイメージがかわり、モビリティシフトってこんな

ことができるんだとか、あるいは、ぜひこういうこともやってほしいとか、これ宇都宮にも入ってたらいいなとか、そういうようないろんなアイデアをたくさん出してもらえて、まさに創発的だと思います。

カーボンニュートラル宣言はするけれど、具体的にどうやって、と各都市は苦勞する中で、こういう多様なアイデアを行政や民間なども参考にしていだけるものもあるんじゃないかと考えています。社会と、特に国際的な共創をしたからこそ、今までとは違うソリューションが見えてきたかなというふうには思っています。宇都宮市は脱炭素先行地域のモデル都市に選ばれたので、これからの政策変化に役立てばと思っています。

もう一つ、一連の活動を通じて学生たちも自分ごとと捉えるようになるという気がします。環境問題への行動変容は実際にはあらゆるレベルで必要です。その解決法を考える意志決定プロセスは、一部の政策担当者や知識人たちが占有しているイメージが強かったと思うんですけど、多文化公共圏で議論をすると、学生や市民からも受け入れやすい施策、有効な施策も見えてきます。また学びを深めると、これは本当に自分たちに関わってくる問題で、何とかしなければいけないという当事者意識も生まれる。現実には技術オプションがあるなかで、足りないのは知識だったり情報だったり、選択肢を増やせる政策だったり、そういった気付きが増えて、学生たちも、より積極的に関わっていきこうというふうに変ってきました。これも意義深かったと思います。

中村：はい。いろいろ、多文化公共圏とは何かという話とか国際学部として何をやらなくてはならないかみたいなことを考えたときに、高橋先生が今、紹介してくださったような取り組みは非常に重要だと思いますし、実際にそれが成

果を上げているということはよかったと思います。ぜひこれからも、いろいろと取り組んでいただければと思います。

米山：ありがとうございます。それでは田宮さん、コーディネーターとしてホームページの更新などのお仕事もありますが、多文化公共圏フォーラムのコーディネートをしていただいております。何かお感じになっていることはありますか。

田宮：私のほうは、今年度から主にフォーラムのお手伝いという形で計画やセッティングなどに関わり、特に一つ一つの内容については知識がない立場で、全体に今まで二十回、これからやるのを合わせて二十数回フォーラム開催を経験し、段取りのようなものを少しずつ把握できるようになりました。一方それぞれのフォーラムを担当された先生方は、私とはまったく違った視点をこれらのフォーラムに対し持っていたらっしゃると思うんですけれども、まず先生たちが専門で取り組んでいらっしゃる事業があって、その成果を伝えるためにフォーラムをやるよっていう形のものが多いので、先生がフォーラムという形で講座や集まりを開催する際のノウハウというのが偏ってるというか、先生によってまちまちなので、そういう意味では例えば私のほうで何もなくても先生の側でどんどん進めていかれてしまうものもあれば、どうやって告知したらいいですかとか、外の人を集めるにはどうやったらいいですか、といったことから協力していくというケースもあったので、そういう枠組みの一貫性というのは、まだないのかなという印象はありました。

あと、フォーラムとして一つの枠組みをつくるという意味では、ニーズや場所、どんな人が参加したか、なぜ参加したかという情報をフォーラム全般でまとめて次年度にデータとし

て使えるようにしていければいいかなと思いました。私も初めてだったので、いろいろ分からないことが多過ぎて、本当に先生方の指示を仰ぐだけだったのですが、回数を重ねた今、こういう情報が欲しいとか、先生方にこういうことを教えてもらいたいなっていうことが、かなり出てきたので、そういうのを来年度には活かして、よりよい、まとまったフォーラムというものをつくるお手伝いをしていきたいと思います。

米山：ありがとうございます。いろいろな課題についてもご指摘いただきました。それでは最後に、今後の展望というのでしょうか、今後こうしていきたいとか、継続しているものをこういふうに発展させていきたいとか、あるいは逆に課題等ありましたら、先生方1人ずつお話しただけければと思うのですが。倪先生、いかがでしょうか。

倪：今回、この日光プロジェクトは、やっぱり事務局の田宮さん、そして皆さんの力がないと、なかなか難しいので、本当に皆さんに助けられたという面もあったと思います。アイデアについては高橋センター長に、文化的価値についての提案をしていただき、大学への予算申請をしていただきました。残念ながら申請は認められませんでしたけど。でも学部の予算で何とかできました。そういう意味では、予算の確保が課題として残っています。

申：私はあまり全体的なことはまだ分かっておりませんので、自分が直接参加したHANDSと日光プロジェクトについてお話をさせてください。参加するなかで感じたこととしては、HANDSはものすごく歴史も可能性もあって、関係の先生方がすでに調査を進めてこられたとお聞きしていますが、これだけのネットワーク

も基盤もあれば、さらにもっと多様な調査や研究につなげられる素地があると感じました。ですので、今後はそのような方向でどう活用していけるんだろうかということのを思いました。特に、移民第2世代の研究という観点から見ると、ちょうど社会学で注目されている分野でもあり、栃木県の国立大学として、教育、地域貢献、支援としての側面はもちろんのこと、学術的な面からもできることがきつと多々あるような気がしております。

日光プロジェクトのほうも、とても楽しく参加しまして、学生たちにとってもまたとない良い機会だったと思いますし、日光について深く知って、なかなか観光だけだとできないので、地域を知るという点でもやっぱり貴重な機会だったと思います。ただ少し感じたこととしては、どのような経緯かわからず的外れかもしれませんが、学生たちにとって、アンケート調査の実施は結構難しかったのではないかと思います。日本語母語者の学生であっても、突然、観光客に声をかけるのは相当なハードルと思われるところ、参加学生の多くは留学生でしたので、とても難しかったんじゃないかなと。特に今回のように文化的価値を掘り下げるという観点からであれば、必ずしもアンケート調査ではなくて、例えば、私が同行したグループは日光と様々な宗教との関わりを学ぶグループでしたので、お寺や神社、教会など当日実際に訪れた場所でこういったものを見てくる・現地の説明を読んでくるべきだとか、それを事前の学習会で指導するといった調査方法を取り入れるというのも、無理にアンケートをさせないという点では良いかもしれないと思ったりはしました。

高橋：アンケート調査は確か、去年までのものがそのまま引き継がれていたようですね。私も日光プロジェクトに参加させていただいたので

すが、学生たちには、これは去年の項目だから聞かなくていいよと、伝えていました。どんどん見直しをすすめるという今のご意見、すごく大事だと思いました。

米山：ご意見ありがとうございます。それでは高橋先生、プロジェクトについてはいかがですか。

高橋：はい、ありがとうございます。私は日光プロジェクト、福島のフォーラム、UU3Sプロジェクト、三つのプロジェクトにかかわり、そこから感じたことなんですけど、宇都宮大学は地域貢献度の高い大学として、社会からすごく期待されていて、ニーズもあるし、HANDSは特にそうなんですけど、いろんなところとつながってポテンシャルもすごくあると思うんですね。そういった意味で今後も多文化公共圏をどんどん広げていければとおもいます。

ただ課題としては、申先生もおっしゃったように、とにかくみんな忙しくて、私も右も左も向けないくらい多忙です。あれもこれもやりたけれど手が回らない。あと肝心の研究も腰を据えてやりたいけれど、なかなかその時間がない。自転車操業的で厳しい状況にあると思うんですね。これは国立大学全般に言えることではないかなと思うんです。

そういった状況を踏まえると、今年、多文化公共圏センターで事務局体制をもう一度、整えられたというのはすごくうれしくて、小野寺さんも事務局としてすごく活躍してくださってるし、田宮さんもこうやってフォーラムを切り盛りするというので入ってくださった。先ほど、ノウハウが人によって全然、違っていておっしゃったんですが、まさにその部分で、ノウハウがない先生もフォローしていただいています。田宮さんが本当に初年度にも関わらず、いろいろ動いてくださって無事にフォーラムが連

続で開催できていて、今のところ大きなアクシデントとか、何もないですね。順調に開催されてきてます。これは、すごく高く評価されているのかなと思います。現在も試行錯誤中ですので、これからさらに順調にできるように、ノウハウがある先生もない先生も多文化公共圏を創出できるように応援するというをさせていただけるとすごくありがたいというふうに思います。そのためにデータをまとめていただくというのもすごく重要だし、来年の課題が一つ見えてきたと感じました。

もう一つ、大きなのはやっぱり、資金的なところなんですよ。活動自体は金銭に置き換えられない価値があって、意義深いことが多いのですが、ファンドレイジングもアドホックで手間暇がかかります。今年は、学部長のミッション支援経費に助けられたところも大きかったと思います。またプロジェクトによっては結構、外部資金をたくさん取ってきてまして、UU3Sプロジェクトなどは栃木県の大学地域連携事業推進費とか、あと原発震災のフォーラムは科研費とか、いろいろ外部資金もいただいています。ファンドレイジングについても情報やノウハウを、みんなに共有して広げていくことも重要なと感じました。これも今後の展望を広げるなかで、一つの課題として考えていく必要がありますね。

多忙化解消をどうできるかは、本当に悩ましいです。多文化公共圏センターの中で解決できることを超えていることではあると思うんですけども、風通しをよくして情報交換をすることで、無駄も省いて効率化を図ることでできることもあるかもしれません。忙しいとは、心を無くすと書きますが、なくしていかないような楽しい仕掛けというのものも、考えていけるといっています。

あと、まだ今年、全然できてないこととしては事業間の交流です。今は各プロジェクトで

は、それぞれの先生たちが個々に取り組んでいます。先ほど田宮さんがおっしゃってくれたように、突出して走ってる人と、そうじゃない人と分かれてるので、交流すれば、意外に同じとこをめざしていたんですね、これとこれ、連携できるんじゃないとか、そういうのが見えてくるのではと思います。そういったことも、これから考えていけるといいですね。

中村：はい。いろいろな今後の課題があると思うのですが、まず大きなお話としては、機能強化という文脈で変えてきたところがあるので、たくさん、いろんなことをやろうとしているということが、今年度の特徴になると思います。だからこれまでセンターでやってきたことではないこともどんどんセンターの、例えばフォーラムとして位置付けるとか、そういう形でやってきているので、まずはその様子を見ないといけないと思います。これからどう絞って入れていくかということも同時に考えなくてはならないと思っています。そのときに大事なことは、今、高橋先生からもご指摘があったように、せっかくいろいろな取り組みを行い、可能性を広げようとしているので、その中でつながりを見つけるとか、今までにない新しい組み合わせを考えると、そういう機会に、ぜひしていきたいなと思いますし、きょう高橋先生が福島フォーラムとこれまで取り組んでこられた取り組みが、つながりがあるという話をされたんですが、そういうことをもっと外に発信したらいいのかなというふうに思っています。

申先生や田宮さん、新しくセンターに関わられた人たちがどういうふうにご覧になるのかなってというのが、すごく興味があったし、今日は実際にお話を伺いましたが、またもっと、いろいろつっこんで話を聞きたいと思っています。それと関連して国際学部 新しい先生がたが着任されていますので、その中にもかなりの

先生がたが、このセンターの取り組みに関係があるテーマで研究されているので、そういう人たちにもまた関わっていただいて新しい可能性を探れないかなというふうに思っています。最後に、米山先生が、来年度はセンター長をお勤めになりますので、ご活躍を期待しています。

米山：どうもありがとうございました。いろいろな意見をいただきました。今年度副センター長として引き続き高橋先生とご協力していきませんが、来年度にもまた活かしたいと思います。今日は長時間にわたりどうもありがとうございました。



本号の特集は、「多角化する多文化公共圏センター」と題し、座談会を皮切りに、多文化公共圏センターにおける多様な事業を列挙してご紹介します。次頁以降に紹介する11の事業は、それぞれ、異文化理解や交流、内なる国際化に伴う問題への対応、国際協力やグローバル課題への対応など、多様な 이슈を対象としています。しかし、多様な教員による異分野融合型の活動であったり、国境を超えた連携であったり、行政機関や市民社会の諸団体・個人等との社会共創型であったり、あるいは研究教育を融合した学生の主体性を活用した共創活動であったりと、多文化公共圏の創設につながるものであるという点では通底しています。多文化公共圏センターにおける多角的な活動について、ぜひ知っていただき、また読者のみなさまにとっての「多文化公共圏」への道標となれば幸いです。